

大山村史

丹波国大山荘といえは、歴史に関心あるほどの人は誰知らぬ人のない、基本的な荘園の一である。この荘園を含む大山村の歴史が、本文篇一冊・史料篇一冊全二冊となつて、刊行されている。いささか時期は失しているが、いろんな意味で最高水準の地方法史として、紹介させていただく。

大山村は、現在は解村して、兵庫県多紀郡丹南町の一部であるが、大山財産区のこと業として本書は編纂された。編者は宮川満氏、他に島田清、大山喬平、脇田修、宮下美智子、浮田典良、安丸良夫氏と、それぞれエキスパートの諸氏が分担執筆している。史料にめぐまれ、この諸氏の前後八年の辛勞の産物とあつては、記述内容は、むしろん最高水準のものと呼ぶのではない。二章律令制から荘園制へ、三章荘園制下の武士と農民、とが中世大山荘の部分にあたるが、東寺百合文書のほか、現在刊行中の『教王護国寺文書』所収の史料もふんだんに使

われ、最もくわしい、かつ最も新しい大山荘史の概説となつている。荘園関係で三四表の統計表を作成され、記述の典拠には史料篇の番号を注記して利用に便ならしめられている。大山荘は、たんに残存史料が多いばかりでなく、官省符荘として出発し、地頭の設置、守護の侵略にあつて東寺が経営に腐心し、田堵・名主・番頭・悪党・惣等々、荘園の問題をすべて含んでいる点で、荘園史研究の基本的・典型的な荘園である。したがつて本書には承平二年丹波国牒の臨時雑役を負担する「堪百姓等名」の問題をはじめとして、学界論争中の問題が山とあるが、論争的な記述はさげ、史料の示す事実をたんねんに示されている。

財産区の各戸にくばる、という本書第一の使命の要請もあろうが、本書は、大山荘の全貌を知る、基本的な文献となつた点で、学問的にも貴重な業績といえよう。戦後、荘園史の研究の花々しい開花にもかかわらず、それぞれ問題意識が先立つて各荘園の基本的な事実を学界の共有財産とする努力は比較のおこたられてきた、とはかねがね私の主張しているところであるが、本書の地道な努力に敬意を表したい。

中世大山荘につづく近世の問題は、荘園史の側からも極めて興味あるところであるが、太閤検地の史料が残存していないのは残念至極である。しかし一七世紀後半からは基本史料が見出されるので、中世史との統一研究が、今後の課題となろう。以上中世に偏した紹介にて恐縮であるが、近代・現代の歴史から民俗までを含めて、今後の大山荘の研究は、本書から出発し、本書によつて反省されねばならないであろう。

『史料篇』は東寺百合文書から六〇六通を収め、他に仁和寺文書八通、土佐文書三通、中沢文書二通、慧日院文書二通、高藏寺文書一通、井上泰輔文書六通等（以上中世）のほか、中沢、中道、安井、西尾、園田各氏の近世文書を収める。東寺所藏文書・記録のうち、引付記録の類は省略されているのが残念であるが、刊本『東寺百合文書』がなかなか進行しない現在、さきの『備中国新見庄史料』について、かくも多数印刷に付されたことは、学界のためまことに有益な事業である。関係各位の努力とともに、『史料篇』のため費を惜しまれなかつた大山財産区の英断に對し敬意を表したい。

(A5) 判本文篇六〇四頁 地図大判一枚 昭和
三九年八月 史料篇四六一頁 昭和三九年
四月 寫書房發売 定價計五、五〇〇円)
(熱田 公)

和泉市史 第一卷

和泉市は旧泉北郡二町七村の合併になる
市で、中心部の旧和泉町は和泉国府の所在
地であった。本書は市制十周年記念事業と
して成ったもので、和泉市の現況ならびに
環境を序編でまとめ、本編として原始社会
・古代社会・中世社会を扱い、近世社会は
第二巻として近刊の予定である。うち、原
始社会と古代社会の古墳・窯業關係を森浩
一氏が執筆された他はすべて、専門委員と
して五年間常勤して編纂にあたった三浦圭
一氏が構成から執筆まで担当されている。
その内容に関しては市史編纂委員は一切制
肘せず、三浦氏の自主性に委ねられたとの
ことである。このことは地方編纂にあって
は当然保障されるべきことではあるが、学問
研究と地方住民の生活との正しい結合を進
める上で一つの成果として確認されねばな
らないだろう。

さて内容について略記しておく、第一
章原始社会では池上弥生遺跡の調査がくわ
しく、第二章古代社会では、第一節「日本
列島と日本人の起源」で著名な黄金塚や八
五にのぼる信太千塚の群集墳以下の古墳の
紹介があり興味深い、今一つこれら市域
の古墳の分布図があれば、次の古代豪族の
蟠居の紹介部分、第二節「大和朝廷の和泉
進出」とあわせて社会発展の第一歩の様相
がもっとわかりやすくなったであろう。第
三節「大化改新」では奈良制遺構の復元を
行い、第四節「奈良時代」で和泉国の河内
国よりの分離成立の事情と国府と国分寺の
説明から農民生活・土地私有の発生・行基
の活躍に及んでいる。以下各節は政治・経
済・社会・文化の各ジャンルにわたり、関
係史料を駆使した詳細な記述が行われてい
る。第五節「平安時代(前期)」までを古代
社会として章別してあるのも本書の特徴で
ある。

第三章中世社会以下は三浦氏の専門のフ
ールドであるだけに読みごたえがあり、
本書の中心部分をなしていることはいずれ
またない。何分にも関連事項を網羅する形
の市史であるため、つっこんだ議論はさげ

ているが、氏は本章に關係する問題のいく
つかは研究論文として世に問うているので、
あわせ読むにも有益である。第一節「平安
時代(後期)」ではとくに泉大津の木屋をめ
ぐる国衙機構の問題と池田郷の田堵層の田
地争論より名田の起源と領作の権利の実態
を分析した部分が印象的である。第二節「鎌
倉時代」では地頭一覽表が掲げられ今後の
研究に裨益するところ多く、谷山池・梨子
本池等の築造と池田谷・松尾谷開発や土豪
の悪党化の部分は、氏の「中世における農
業技術の階級的性格」(『日本史研究』八二)で
門田苗代を軸とする農業生産力向上の問題
として発展させられている。

第三節「南北朝時代」では、内乱期の在
地の土豪・寺院の動向、前記三浦氏論文で
闡説した農村動向に直接続く問題となる唐
国村と春木本庄の境相論、黒鳥の麴座、大
念仏本尊仏の廻在等の問題が述べられてい
る。第四節「室町時代」では近來学界で注
目され来った和泉国半守護体制の問題から
説きおこし、荘園制の衰退・鄉村制の発
達・民衆文化の発展に及んでおり、『政基
公旅引付』に躍如たる近郷の日根野庄の様
相と同一の畿内村落の雰圍気をうかがわせ